



浅間山の観測状況は常に確認されています

住民の皆さまに知っていただきたいこと

火山災害として

- 火山は前兆なく突然噴火することがあること
- 小・中規模の噴火があっても、天仁・天明のような大規模噴火に発展することが今後必ず起こり得ること
- 山に雪が降り積もっているときに火砕流を伴う噴火が発生すると、融雪型火山泥流が沢筋を下って、麓へ流れ出る可能性があること

気象災害として

- 噴火がなくとも、火山地域や火山灰が堆積した場所で大雨が降れば、土石流や火山泥流が沢筋を下って麓へ流れてくる可能性があること

浅間山の麓で生きるものとして

- 浅間山への登山をとおり、浅間山の恵みや自然豊かな環境を確認してみてください。

Q 浅間山の観測体制について教えてください

浅 間山に設置された気象庁が管理する観測点は、22点あります。

気象庁管理の観測点	
地震計	7点
空震計	4点
傾斜計	4点
GNSS (全球測位衛星システム)	4点
監視カメラ	2点
光波距離計	1点

気象庁管理の観測点のほかにも、長野県や東京大学地震研究所などが設置する観測点もあり、研究対象や防災の観点などから日本国内でも観測体制が充実している火山です。



2019年11月29日 町がドローンで撮影した浅間山火口

判定基準の中で、火山性地震の回数の基準があります。火山性地震とは、地中でマグマや熱水が動くことによって生じる地震のことで、体に感



気象庁 ホームページ 二次元コード

浅間山では、噴火警戒レベルの判定基準も定められています。詳細は気象庁のホームページをご覧ください。

レベル	キーワード
5	避難
4	避難準備
3	入山規制
2	火口周辺規制
1	活火山であることに留意

Q 浅間山噴火警戒レベルについて教えてください

噴 火警戒レベルとは、噴火時などに危険な範囲や必要な防災対応をレベル1から5までの5段階に区分したものです。

各レベルには火山の周辺住民、観光客、登山者などにとるべき防災行動が一目でわかるキーワードを設定しています。



2019年8月7日 小噴火 (鬼押し出しから) ©気象庁提供

じられることはめったにありません。

一方、火山性地震が多くなっても、噴火が起こる可能性もあり得ます。昨年8月7日の噴火がその例になります。

噴火警戒レベル1で、火山性地震が少ない状態での突発的な小噴火でした。噴石は火口から約200メートルの範囲内に飛散していました。

幸いなことに噴火による噴石は登山規制の範囲内にとどまり、登山者がいない夜間であったため、被害はありませんでしたが、もし、登山規制範囲内に登山者が立ち入り、死傷者が出ると、近隣自治体への風評被害にもつながりかねません。

浅間山 火山防災を知る

観測体制と噴火への備え



2004年9月16日 小噴火 (追分から) ©気象庁提供

浅間山では、6月25日に、噴火警戒レベルが1から2へ引き上げとなりました。レベルの引き上げは約1年ぶりで、浅間山の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動や火山性地震が増減を繰り返しながら現在も継続しています。浅間山では火山活動が高まっており、小噴火が起きる可能性も考えられることから、軽井沢消防署内に事務所を置く「気象庁浅間山火山防災連絡事務所」の飯島聖事務所に観測体制について聞きました。

Q 気象庁浅間山火山防災連絡事務所について教えてください

気 象庁は、全国111の活火山の活動状況を監視しています。

このうち今後100年程度以内に噴火が発生する可能性や社会的影響を踏まえ火山防災のために監視・観測体制の充実等が必要な火山として、50箇所の火山が指定されています。これら50箇所の火山では、噴火の前兆を捉えて噴火警報等を的確に発表するために、観測体制を整備し、火山活動を24時間体制で常時観測・監視

浅間山は観測体制が充実している火山です



気象庁浅間山火山防災連絡事務所 事務所長 飯島 聖さん

気 象庁浅間山火山防災連絡事務所は平成20年4月1日から軽井沢消防署内に設置されました。気象庁職員2名が駐在し、火山活動評価に必要な観測および観測点の保守点検や火山防災業務を地元自治体と連携して実施しています。

浅間山もその50箇所の常時観測火山の一つに含まれています。

気象庁浅間山火山防災連絡事務所では、浅間山の現地における観測、観測施設の保守・維持管理、火山活動についての情報提供とその解説を随時行っています。

現地における観測は、火山ガス観測、火口観測、ヘリコプターから火口内および周辺の様子を陸上自衛隊の協力を得て、年2回程度実施しています。